志ほり萩

911.3
シ

二編

去留主人 秋

杜上年賀越して見ぬ庵主の
[illegible]
姑射子秋の雪に[illegible]
よそ[illegible]
しる又[illegible]
連俳とも四時の変化[illegible]
其の[illegible]人や[illegible]尾濃
三[illegible]の[illegible]指揮に出[illegible]

逸流閑庵

揚舟

吉[illegible]の
小僧[illegible]
青[illegible]里

露乃先、似[illegible]

蚤知に跟を削むけ程ハ之阿出
矢作の郷にゐとり来まれ人意乃
変化かくれしを狀目ハ格外唐に
むかへ唯並ハ出居直にまつりく
宗師ハ入るまわりたし見ハ翁之の
一篇にしのを思ひ之緒経と掛ゐたに
越路のあ川月帆をあり路首證り
子稿社ぬたちけて越の長濱なから
かりすも秋ハ端ありよりつ生の一般乃
袖をかく初月の玉江乃穂にまゐけ

たゆらに宵この句集のあり〻と出え
出に照尺の筆度文かく社とし能も
居うけ以になん道の信たる〻を
門生おのく写し語録をたち纒ひ
出版おも逆千里憶を箕山の中に
たえて唯慨然とこの以字跋を
六月十八日にあたる有きる

明咊七年庚寅

三陌園垛下

竹也

武江

古翁の節社むかし紙
さゝふくる庵の暁臺子か
墨翁は師ハ宗の風家の
たしかなるよし

大無坊

手絹くくとふ細石そかんこる　秋瓜

風ちりくるふ椎のもみぢる　暁臺

蚊帳入て裸のなかもはなゝ南きて　堅堂

門ちらのひよハいつなる柳や　卅介

いろく小雲寄の代りの月明照　亭牛

菜は花に舟乃ねぶる堤の夜　之禾

た這ひ身に出来緑のたゝみ付く　東枝

東都を離て少しはかり咲其子
四ッ谷の草庵を訪ひ
きゆて深更一碗よ茶話をおしみて

世味菴　竹介

初時雨のあさきのもさ抱霄所

あの山見えは隈とく初雪　咲其

ふ月雨り拙好まよちか蕎請しき　竜牛

乃びくくと錦をひくくし　秋氏

川舟の棹のいりあふ月の典　琴堂

浪い鰻ききん羽庵丁　之禾

送別

夜半の霧をるみさや路ちまて　竜牛

行くて越路よ行せ斤拭ひ　琴堂

きぶは風のうつりや袖か浦　之禾

来はなまゆ送や笠も夜のそめ　霧後

道くの落葉や掃て志かふ招　麦遂

うかもの雪に咲惜し京川　骨舟

告されての上や漕うん涼を松　先梅

蓮葉の咲墨隣子志いつて九
実江て杖をとめ手川盥の
恵よ咲り水鳥深の合歓て
下部して粧ゐ今い越語らしと
出ふ粧ふ紙うる

京中庵　蓼太

帰る程山うち見えて出る夏衣

荻のちらちら小傍通部とと　咲墨

二親子女ちらと男浪の酔とりて　吐月

浅次おもへと詮かた咲つき　眠象

月さへ擽くる窓を浅よ明ちる笹　雷堂

ころ紙とり落す駒の淀ちつつ　山幸

動化千浪虚実儒ちの操社しる　連丈

被ひそらに如くてわんなれ　文来

おもちゆ弘繋古の起く紙小もり　収格

しなれて松かた胡白猪さる　何人

抜粋　久り缘

篭に見れ花を昔の名残かな　何人

見惚の田植哉うけて雑踏哉　松桜

月はさそ雪も卯木社むかし時　文来

白川や額社目殺も麦の飯　連丈

夜をして鳴海綠りも文字摺も　山幸

先まはく夜の朝の名山やとし升　霞堂

かり川もんとうつしの浮哉竹枕　眺叔

松はきめ合歓に痺んとや策まろ　暁月

それのいさを詠て松しまへ
呼れ暁臺子小窓しくく　氷田庵

鞍はおもく忘れぬともて袖の句ひ　小知

白川の麦乃秋風も凪は去めと　金洞

留別

幸様を送らんと風子誰かれ
こちら成江の庭くり小
離宴哉おけらく

おちこゐ社根塩白を定むれ
わとちりぬ　暁臺

武蔵鐙巣

尾張の某与といふ人東に下りて奥羽の
志ありけるしかれて告ことはりる侍りやつかれか
江都の中府より小むかへきて旅宿ば
かくさえ武蔵の風雅に移ひて漸く初目
乃末結らまありし布袋庵に到り七世の
系云を譲て接轄の情をむすぶ故

布袋庵 柳几

巣掛りしさわかしいは起て居るぞ和す

鶯をしくらもきはとくらす里　暁臺

鳥桶に庵りは雨歟明てきて　兎陵

右亭仙下略

送別

おたくに酒肴を設乃え
き紀多の思ひより小川の趣

保命酒　布袋庵社中

お川切目と命長く川や酒の徳　擬兄

鯛

垣鯛て来るや桜さく紫の陰り　東甫

人太

松うちの以出まし心太　椎山

悪多酒

ふ秋夢もましいつ里もし悪多酒　素川

ちん

鶉なくや黒萩の中紀りぬ明星　素牛

初鰹

投頭巾のこぼるる辛子や初鰹　篁雨

青柚

はや川に一疋づつむ青柚かな　味燮

あらひ鯉

躍るをとつめたき鉢やあらひ鯉　冬花

河いとり酒

粟蒔や添うて汲む河いの川　兌境

鯖

阮籍もうれしく見ゆや鯖乞　拜雪

ふな

きみよしや魚より昆布の丸合羽　清柏

葉隠

葉かけに枝移しろや夕涼み　枚夕

志摩

はしめふる荷むとのや紫蘇畠　月草

一夜鮨

馴るほど飯は味あり一夜ずし　英桂

角田川酒

きのふ川に舟ちや角田の川涼し　橋志

子松茸

折らる笠ぬいではりや子松茸　彦柏

青鷺

青鷺や尻は先へと飛んで行　有路

蓋をゝ路

あしきやきをやしなふ　一陶　杏己
おもひ

不二讃は夜につゝ蛛して河茄子　竹季
菖蒲酒

法のつまは雲もましおやや風　郭丈
干飯

膾いとのとおもりぬ干飯から　樗園
みつもん酒

春風やふやりと其紀尽あさり　松叔
海雲藻

先くもおもしろかりんこ唐も杠　暁作

めぐり

青芒も露さえてきや若竹の子　藍二
一和路

蚤の居はひらねいたちも蚊ひらり　史苗
竹はえ

筆や育て菊とおもり水府　凡乙
祢ひ雲雀

雨さ入は術もつちて練ひろて　民石
凪

わり接も又おもむきけん凪の夏　吉眼
蓼

蓼は茶やものたらしと諸きつ利　祗道

奥州風流おもひやりて
[illegible]見送り出立す

語いきれ松島のこと思ひ入れ吟　柳几

下野国日光

神祖奉納

瑠璃も黄金一聞小簀ちよ雨の下　暁台

黒髪山

見はらしゆきも櫻にやさし[illegible]の中

雨日華厳瀧

雨越出て雲より来りし瀧の上

那須野にて

野を撲よ照る小蕨の庵葉かな

殺生石

那須山なる殺生石ハいち中に
埋てはるかにねむりあり
毒気猶世に蟻蝶の類ひ
う[illegible]もの息絶す

鳥飛んで何にくひ入る　絡緯乃[illegible]

陸奥　白川

信夫郡　梭鳴

としはおかひうきし関の古ゑくは
殊にむかへしといふ見ぬ世なれ友にはし
西へふかくちかせしまて何といはなく
ちうしあり故人衣を潔く冠なし
西はときく一嚢を腋(ワキ)にし荊蕀
をまとひて拔なやむ孤島の
月勝て扇一本に感涙をとく
のへ飄々としていなれ

白川をあふよ扇の切目(セメ)きしし世　暁臺
あつよひ除うへす袖了橋　香須
餘陰深の郡より頭に繕いて　吐虹
借金はくまの氷もかりあふ　二流
九ニ秋第つよふ降て高き月　紫雅
手摺と吹摺の当れ捜せ哉　菊扇

修支山　　　日不

田雨の香いろ夢境哉

兎角行事徘昔湖上乃

伴以門月弥わすりそ給ふま

雲向ふまま理

しを称うるし

氷涼し清水中の島数山　暁臺

蓑を栄衰の用ゆへ笑剤　祥之

兜花ぬ世も夜桃の光りて　之保

又落ま似す相帰の空と　有泉

内佛の菊きんとうふ調けて　一鷺

金やん気くも叔母の尼丹　鳥古

文字摺

伊達郡　宗朽

志み路にもちすりハ須まひ里
ほと摺ゆてわふ戸川を渡る

雛餅や人顔之まね水の隈

后のおもてしら紀井より河伝す
みよしに田夫のおちをなれりとれて

文字摺やうしろに心北夜衣　暁臺
草藪ムセに落す露の山路　回車
紅玉の馬に尽み乃笑きへて　豆苗
もみぢも紅さハ園縁　村牛
揚簀戸に身をし入て仙葉瓶　卜而
わらびハ鳥鵲雨に起ふ　十虎

葛松原

柴田郷　大河原

芳英の庵ハ山路ゆかしき所
なりと足えて家に蹄りとも明
くつま西上人の翁うえし書き
あらせの跡をしのひまてなり
けり誰趾人の谷に打倒してんハ
松原なりけるかあてもの名残りに
首きれ紫門后に頭せ(トサ)ん精康
またつく源樹濡りと序ふ清宗
けらふ葉ちを出かる利

字ゑ寺も花の入相や松原ち　咄嘉

皆を赤御しに葛松ら花　芦中

きふるよみはふ加とゑのもとく　柳美

旅の瀬も身しぬ旅路　也寥

ゆふ屋く月まち霧の新(アラ)ゑ　加生

竹林まちハおとしろの秋　女 柳風

伊達妹戸　福嶋

山は肩に洞を抱きて一詩
茶丈に錦をも以へる地搯伏
虎なとし煙雨を川うけて
夕陽を記すは鳥とく
めて頭を見くる

ちるまゝの山元として伊達妹戸　暁臺

うらにはゝくらへ田長鳥　篁風

声ゝくは猫女と挑の膝うへて　捷江

雲のむもかれを延川ちゝめん　夕芝

ち径は堀にかゝる乃船　蕉索

柚うそ一ゝ海棠ゝ郎妹　左溪

武隈去

名取郡　岩沼

この松を見れとくはしも
ふたはえて落葉も打かひ
うらふきしによるかけの　蒼韓
二幹に立わかれて角をしや
以みて一本とは見ぐしあらは

松陰や月は水にて下涼し　暁臺
雁によのきてもつ月盾よ里　休粋
ありし世は中と源氏の幻に　旦水
鳥了舊社宵はつるく　素粒
家なくし集めし月の留杣　成完
都をえ里退きは　ともび行く　為文

燈下花

道祖神　　　　　　同　塔白

この神はむかし東路にて
色ある枕をかはさぬ不
ちかひまて翁様ハ世人の身ヲ
誤ふ猿ミを救ひ家あらはれて
坂風よりのかなふる斗数の源泊
なほ又数ちあハさる招ひ乃
まもは

夜業を勤ひて鉄も精まかり　　暁臺
棚下ちかしは芭の笠嶋　　林石
商人のものを相談を荒させく　　生木
座中すかしく舞いハ嫌し　　荘来
宵のうちを月も行く行思ひ　　全来
村まて縁ひよ鳳子の古跡　　九江

寳方墳　　仝

芭蕉塚なる墓筵の茂ハ石よ
りそおへまあやし紀居士の指
を同し竹の茂ミに古寄り庵
うれなくつく蔵中行の古墳を
おす花と咲く一時をくらて
蝶と化して塞よえへ花も人
その於乃桃了らりしや此ふ
らくの境までも生し黄井か上を
意は世をあ同かし思ひてかへハ
切ツよき桃のたのしみ侍りハ嬉しく

塚古く小萩ならし紗目をつ寒やさて　暁臺

以くよ路り行竹紗さみされ　栄山

蔵原の眺ゝをいさと之絃了　完似

気移てみするす啼すとと　智凡

松えて船神いふ蕉紗月　南栄

夢写の様を目出き姑蘇　車麦

仙臺冬至庵社中

目出度く日を送迎し漸く仙府に
入て吟雑談にけいやう人の作す
有りけ宗匠を訪ひ逆の来て
はしめて拙の踊子の地にてせら
る迎謹や短冊破ふといへる詠も
おもひ出て連衆の作たくよ
郎は其一日郎外へいさゝかにゆる小
田舎の里一眺よはえしもこゝめる
老臆耳象の地也利

暁臺

這ひ枝わたる人も有へよもの國から

人影も幸里外日はるゝ　丈芝

宿世縁うすき紅葉の錦ちりゝく　東輕

月ハ見ぬりけと歯さしつゝ之　菜交

有明よ空し設髮ひく小箪お　免耳

音を波りと湖を音り少　郎子

高燈籠　　月連

こまむらめこうゐをかせ木の
下ハ高こひるよ鳴くとりて
稲妻のいとまなきゝ山の花に
斯き眼人をはらひて咲ま川を
きはわりの萩秋にゝ姫とと
扨よくもいと宜し

高燈籠や雲ちかき風よ夜の露　哄基
こうたとやせかさし扇哉　菊史
傘もとも雪ふるものゝを握りて　等氷
月よし雪乃雪もみゝし　基耕
男鹿鳴こ秋山もとの行燈籠　一芳
稲のそよぐ戸なき紅雲酒　東枝

津くし図

此川の流れや昔ハさかりて
うつし置つる程て一幅乃
光縁字舞接唐の枕也
なかりつゝひと日あまた人と
まゐらせて海のきたりよ
むかしから茂るくもちに茂を
うたちり詠ひと言ぬし
ほかさを見る人との心しを
おのふ類ひなきへし

風かほる園やむかしの紀楼ちり　暁臺

暮来て夜も残ッく綱　金馬

九年めのまへ自然おもぬ社得さし　右幸

わすこのちれ菜よむかれ照る　松宗

切らくと日の坑をむ松の実　東雨

厚いその山ぬ無数ちりけむし　梅之

登愛宕山　　果非菴

直下に仙府の大路を瞰めハ
竹窓ハ多く蹴斜しく攬下の
こゝやこゝに集まりしと都ふ尽ハ
乱山尖く旋聳え太に澹淌
を攀せり

山一方風みとりまゝ十方哉　咄堂

嶽もとゝちゝす嵯峨續　芳角

源賞に聴て脚ハ清めまて　芳泉

楼の貴付も写ゝる遠乱　松巒

月もちや秋にちかさふ泝手被　雨夕

咲く川暮夜に畑の兔倍　嵐朱

壺碑

加定庵

路曰去蝦夷国界一百廿里との事を以ちら
ま一千余里之日本記京行帝の朝ま日高見
国の夷賊征伐を奏す日高見ハ今日本紀生
ふして本国北辰ま日高見明神鎮座ます昔時
蝦夷ま属すと云由一百廿里ハ此也伏波銅標
走きたわるも君が代や西戎奴も争ひ小狀貢す
紫塞も我諷く風雅ま頽ぬ々あまりえぬ
假くま杖をちからに初葉露の路なをらし
まらひ出つ家ま帰てはるく碑文ま国界を
おもへは拙きま故里の情を思し涙さ胸我

壺て眼高うとし宰夏の哀ふ羅鶏総の
しへちる月夜しや　暁臺

碑や立ち残去りて笈ふ日　杉司

あら碑居の廿歳しとうも

琉しと咲矢乃穫(エモノ)笑将る　葉静

うし表なお傍紫北中　女 仏之

つかれ戸板あやうき雨の月　松月

橘の底紫れちつとりとなる　志茎

十符菅　　直菴

古柄の楊眉丹干の懐よ
もし例しも皆らしま哉橋
果をとりてはとよ陰させ
らはて以へ出をは保らりす
柳毋ひ出てゝ一めと刈とりて
笠干らはむ十布の識も
おほものを

はなかすみ萱一もと社風とり哉　　暁臺
蝉よしくれ〻園の松かな　　布朴
八夜帆画屋計よ縫おげ〻　　布泊
下戸らう先へとゝみ出るゝ　　文木
しつまりと月を笑ちる岸の縁　　和文
あれひ車よう傷まり乃　　壺洲

末の松山

松島に入てまも庵乃出山ハ
なとりして松の外かし
墓ハ築く碑とかけし枝ハ
あかし婦ら螺りの末も絶えハ
皆かくはかなくうかし哉

赤完庵

曉台

あはれさや末ハ誰かのちり松葉　陶家

露けしと袖を志ほりし嵐

一かなで錦着て太刀佩て　友雲

消ふれの湯漬追く　古乃

背戸先は庭もうらふさ萩　葛乃

はらひハ稲のとれもちらかし　方水

玉河　　山多庵

昔懸は雨我無し此田此里
に嘯き若く田英と法男に
玉川をと言ひと心て也我し
ゑもしはあらしとそて玉川とや
侍稀とそ川は淀なく高事
下部の松椿又もとえて列

六月や人まかせふ川あつめ　暁臺
涼風鍼して加房冬れ　知昂
俗しくと多新紀長の白碓す　松都
目尺への附は生公副てと　竹柴
腰高よ如くく　桂乃花の雨　可亮
寐させなふ明神の坂　松居

黒塚　　　　武門

黒塚や蟷螂の人影追ありけり　　暁臺
蔵る檀にいとゝ飛ぶ　　麁角
沢こと釜の烹わと活らせて　　家牛
鞠に九損の夜ゆさりちり　　家羅
しまへる月みりとの志りまで　　女 家秋
荻の動て秋と見奇　　家珠

每積　　　　日連

う月ゝしと象も又揺もとめす　　暁臺
そゝりてもなくもなかり川に州
う川とし鴎の汀菜流て　　家鮮
必る代る高れ籾出一木々　　家英
砧拙側に男ぎりなし　　家滴
莖とつて箸にうり萩も咲　　家暉
虹うしの酒の暉も吉日　　家藻

千賀浦秋泊

東陳郡　塩谷

日以ゆう高し一駒の輿おろ
せんと千賀乃浦はうひて
漕出ゝ船を横さ處は顧ふ八
老松高く渚をの枝之樹
新蒹ゝ沼えもく坐静之

秋もち葉嵯峨ゟし瀬とんと　暁其

坂もつ里のりふけ客もおかもる　魚行

破きめハ楓の退りもと得て　鵜里

律茂ち唱ハひとつ介し　左亭

丈六の白毫もうす月か照　谷練

保縁簾を捲ハ秋も来ゝ吹　雲底

塩竈明神法楽　　同　不知

暁臺

寂しさは何くいかれと神館
むまの瀬は清き藻の花　雨石
うつゝなき蜻蛉の眉に揺れ明て　、
ゆふりの扇捨てもやゝ出る　、
鮎おれて駕おろしと翁柳　、
おされ椛の撥子　遊生斎

登寳山大悲閣　　同　高城

松嶋ハ答ふごとく寳山ハ落花にちりしもよふ霞にむふ

嵩山や花咲くに見え誠あり表　暁臺
雨風（アナシ）涼しう撒に落雲　東雲
梓明とらくかゝる世を笑て　百馬
仕懸に惑ひもめぬさられ　武山
音のつゝりを悪敷聚居ひとへ　丈車
幾も幕の何かしの院　樹音

緒絶橋

志田郡 古川

むすびし名何の由縁とも
不知にひ傳へし説を
ほそうかゝす去を當てへつ
小沼来哉源を橋なり世く
此辺人ありひを尋ね
かうた

短秋のをはれや漁ふ葦かゝらで　暁臺

露も路なふ消る坂はしら　素内

移ろし住もし雨に縫つけく　東菊

商賈は先川きゝひ影なり　栄里

一条むか宮と人うしふ月かな　桃室

蛍樂たほ子猿の木傳ひ　知康車

姉歯塚　　　　栗原郡　文里

当国采女ハはるかの御代
世わり郡なりける一雙の玉珠
姉ハ名を知ふ其名つたえて姉なん
都へ召せらるゝ此道にて病ひ
にかゝり終ニ身まかりけれハ
哀しの松を栽て埋葬す妹
なるもの副て都へ召せられけり
哀にかゝりて亡姉の哀しき
跡を名付て姉歯とも姉墓也

暁臺

捨ることも姉ならて松一本

都のつとに何順なりとも　沈泣

隠元社名ぐる菜諸も光りて　捧江

大工も心以待うけなり　麟趾

讀ハ中ゝ月に歎ゝ面の営いりけり　石梅

苔生そ雪つむ松に声の穂　不賣

高舘懐古　　輕井邨　山月

命義ヲ惜しみ名を
千載の路傳よとゞめしハ
義主詳る忠葉皆よ殲れて
世よも果を待ちけともいへ
一城や勇士運兵義を尽して
多く一朔の夢烟よる鳴呼
永くして恨らくハ田撲ヵ三百人

畊人某

虫こゑも鳴あり草木之
川ハ二瀬よめぐる涼風　桒林
玉よ節あ目先ずても許されて　曲肱
理氣なとよハ已もまいらす　菊山
竹の葉二月もひそかに吹拔也　笄之
ある時の流転よ垣の瓢箪　罡皓

松島

東京ちりぢなる頃日までに
晩なるつも箱根をもむ刺ハ
湖尾よ造りつけて秋る九
ちうめ又何ゝ佛しぬ多ち
並ぶ處く身よむらふ程ハ
伊勢小町ありて人毛ぬ友
と思ひらん様子湘江の

八九を臣として孔岳陽ものく
もりなりしと書つさうひまても
今宵の歓といふ松島も山く
ひを流ふるありあみしゝ哉
しうへ遠あり西羽左右へ
書つて明月まよりよしと云

まり川嶋や夜を
をあけて秋の暮

暁臺

名所

蝶ちるや斯うして行ハ榎からきて　蒲サキ　祇川

おもしろき浜辺や入江の汐まさに　江戸　乙瓢

橋のうや坂もおまれ案し麻、　魚州

送别

行って此川気深を花ころも　三州岡城　桃東

九十九里中よ戻さてお露かな、　石州ハマタ　乙留

雪の日や寒さとる行て鳴鳶　武江切晦　天遊

柳行柳まで

雨はらふ田へ降るお柳かれ、　旦角

ゆ傳て竹を伐る日そ秋の風　下総く市　珠咀

炭うる夜のぬしっあるまて斧の音　奥浅虫　京秀

まつ下の餐をみて来る柳かな、

志賀柳も木柳りもち朽まちの路

梅さくや硯と氷の井もなし　日光　斧久

離れもひとつおもり川や鄰ふ、　雛左

片側ハ軒の雫や梅の花さかり　麦風

独語も蕗原の花火かな　仝市　璉明

まつかりと去る水梅や五月雨

末枯や去月くま退し僧ひとり　浅兵　家秀

木からしや一日鶏ハて野の声　名は

若菜つむさと里やうんこゑ　巨石

仙府ニ暑日の氷売めつらしくて

言し桜我捨えてまた来ぬり庭朝　暁岳

仙臺

鎌子鳴て去りしく動く小松風　東鯉

まくしきや月の家ハ丑の時　菫史

氷室のはまりくや切くる子　紫交

木枯乃笠とめの早笛くる　卯子

川舟の底も往くる夫の尾　素耕

露立て鳥のと鳴や夜の月　一芳

刈秋や二度さく花も菊の毛　古幸

みの虫の鳴ハ落葉の枯果ん　兎舟

薄我ほふ声の世の中かな　东壮

日はかりハ蕣さへかさし扇かな　千茂

上手同と踏まいりや田植笠　等水

眼鏡の裏文さひし衣つき紅　拾石

み梅やとまく埶州女客　丈芝

延てゆ長は節あり雛子の色　知昂

手紙や兄弟する人ハ袖まくり　松超

かくうるしに威を仕ふる雷はふ　可堯

嘴こを出かく小嫁の育つ杜若　竹葉

三川よあ傍の田と脇て陸なれ　陶家

脇て了様ゝ清山ありおほろ月　拙月

風も又云ふ路脇ていりなほ州　古居

蕎麦を水ほおしむ杜若　葛居

谷蓮は動かぬなれ月秋なれ　友雲

舟ろやかよ柳ちちりし書　女 白之

香ねさあや藁ある蚊帳の熱き丈意　方水

三川雪や京は思ふまとの声　杏莫

動うして風の迹ある一丁菜哉　菜静

五十ト路の養見ん舞ふ花夜　松司

光陰ハとまれくて振子うれ　布朴

蓮咲やあられい月よ照し鈴音　様己

むさしのに妻もちながら鴨うちき　金馬

柳の越すもなやめ清暑かな　万吏

月影へ飛入ものゝほとゝきす　汀冰

ちらるや夢のさむるやうに比ひとつ　松雅

夕の隈や陰をもけさに清萱庭　千賀浦　雨石

稲かけし秋寒て家に入まゝうき　岩沼　一歩

おつきたる蛍の形や秋の風　千参

嫁とりし比子よりおくりし祝の雛子　福嶋　春湏

様子や宵の稲川乃橋篇　栄雅

ぬれてまゝ猫乃恋さや春の風　吐虹

不稲の色や二種と稲とハ丑ゝ成す　二流

見に行との清さうきて朧ろ　南栬

旅の花や勤ぬぬる文一なるを　程之

こゝろにも傾ふ薜あり松の桜　一燈
白雨や見ゆる水ぬ川のいく流　三保
荊棘の葉刈らせて月見かな　肖泉
川狩やはじめて夜よおり鷺　鳥古
鏡餅ひくや嵐の夜明松　伯之

菜形
蝶も翅やなしぬ世帯と思ひ出を　回車
観音の掃風よおりく津菓哉　豆苗

嘱陵長兄明ほいめて桐の木へ赴かんと旅いと仮初に膝ひしとつ見渡すと流るゝとかつ見れハ屋とりを同しうして一盞ノ様哉まうち帷中にはむりつき合せしもやりて雙忽乃もるを惜て感ノ李陵ヵ憶哉いきかり

唐ふる松日を頼なし　暁臺

夜泊り記

[seal]

聖和學園 短大
第6615號
受入
昭36.3.14

楊册一

楊册二